

---

# 命題 = マキナ

門 九郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

命題Ⅱマキナ

### 【Nコード】

N3262W

### 【作者名】

門 九郎

### 【あらすじ】

全知全能の機械が存在したとして、それは一体何なのだろう？  
ロボットか神か、それとも……？  
それは何を私たちにもたらし、どのような世界を作るのだろうか？  
近未来の日本の大学生、葵レオナは仲間と共に機械で神を再現する為の実験を始める。  
彼らは科学の限界にある命題に挑み、人間の最深にある問題にぶつかる。

神と機械をイコールで結ぶ為の物語。

## 机上のクーロン（前書き）

「神様って信じる？」

「信じてないよ」

「何で？」

「見たこと無いからね」

「じゃあ、酸素ってあると思う？」

「あるに決まってるだろ」

「見たことあるの？」

「え？」

「酸素を見たこと、あるんでしょ？」

「……………」

## 机上のクローロン

発掘作業は難航していた。発掘隊のメンバーは全員意欲的に作業を続けているが、少しずつ口数が減ってきている。一週間前まで、大きな収穫はないものの化石が数日に一度は見つかっていた頃は、作業に集中するように注意しなくてはならないほど、学生たちは賑やかだったというのに。

アメリカ・ユタ州の山岳地帯。樹木は少なく、灰色の岩に囲まれたテントの中で大沢はため息をついた。日本の大学で教授を務め、古生物学を研究している彼がここに居るのは化石の発掘調査の為だ。主なターゲットは恐竜に代表される白亜紀以前の生物。約一月前、自分の研究室の学生や院生を連れてこの場所にキャンプを設営した。二週間前からは地元の大学生も合流し、発掘隊は現在そこその大所帯になっている。

にも関わらず、ここ一週間何の収穫も無い。地層を掘れども恐竜はおろか、一つも化石が出てこない。もちろん、発掘調査が次から次へと新発見の連続だとは大沢本人も考えていない。今回の調査の数倍の時間と人員を割いても、一切収穫がないことだってよくある話だ。むしろ、最初の内は爪や歯など、断片的な化石が見つかっただけ幸運だとすら思う。大沢の中では大学の夏休みを利用した今回の調査は十分な成果を得られていた。

しかし、彼が満足しただけでは不十分なのだ。大学の金で調査に來ている以上、大学側に出資以上の成果があつたことを示さなくてはならない。成果の提示を求められて、布にくるんだ爪と歯をテーブルに並べ、金を出すしか能の無い連中に向かって学術的な意義を語る。それを考えるだけで大沢は憂鬱になった。大学という場所は無駄が多い。学問の中心に居る人間に限って、資産からは遠い場所に居なくてはならない。特に、大沢のような遙か太古を研究する人間は資産の中心に居る人間に理解されにくかった。恐竜の食生活や

狩の様子が分かったところで、彼らの懐に金が入るわけではない。長い研究者人生の中でいやと言うほど思い知らされた。

今回の調査はある種の賭けだった。世間は新発見に飢えている。革命を起こせる者だけが一流であり、できない者は三流以下。ならば、この地で新発見を成し遂げてみせる。そう大沢は決意して臨んだのだが、結果はこの有様だ。有名な発掘地でキャンプを張れば成果が出るという考えが安直だったのかもしれない。計画中の自分自身を責める言葉が頭の中で渦を巻く。

テントの中に外のざわめきが聞こえてきたのはその時だった。最初は英語、次第に日本語も混じってきて、大きく広くなっていく。

「教授！ 大沢教授！」

学生の一人がテントの中に駆け込んで来た。作業の最中だったのだろう。両手の軍手は乾いた土で汚れている。

「大変です！ すぐ来てください！」

「どうした？ 今忙しい」

何をしていた訳でもないが、不機嫌だったので大沢はそう答えた。「とにかく来て、見てください！ 地層からよく分からない物が出て来たんですよ！」

「よく分からない物？」

興奮した口調の学生の後に付いてテントを出る。斜め上からの太陽光線が眩しい。大沢は丸めてポケットに突っ込んでいた帽子を取り出し、最近白髪が増えてきた頭に乘せた。

「よく分からないって、化石じゃないのか？」

「どうでしょう？ 少なくとも、僕の見た限りでは生き物の骨のようには見えませんでした」

「じゃあ岩や何らかの鉱物か？」

「鉱物……そうですね、そう言われて見ればそう見えなくも……」

「どうにもハッキリしないな」

「そうなんです。僕達では判断が付かなくて……とにかく教授に見てもらおうと」

話しながら二人はキャンプ近くの崖に向かっていた。断層が露になっているその崖は発掘作業の初期段階で白亜紀の恐竜の爪を掘り出した場所だ。周囲には騒ぎを聞き付けた発掘隊の学生達が次々に集まって来ていて、歩いて向かう二人は途中何度か追い抜かれた。人だかりの中心にある「何か」を見た彼らは皆困惑の表情を浮かべている。

「すまない、退いてくれ。そうだ、見せておくれ」

大沢が声を掛け、集まった学生達を少しずつ左右に引かせる。その内に断層が彼の目の前に広がる。そして、その断層に半分埋まるようにして「それ」はあった。

「何だ、これは？」

大沢の口から自然と言葉が漏れた。そして、二度三度と同じ言葉を繰り返す。太古の地層から頭を出した「それ」は化石と言うには余りに無機的で、鉱物と呼ぶには余りに人工的だった。一瞬、学生の誰かが悪戯で埋め込んだのではないかと思った程だ。しかし、悪戯で用意したにしては「それ」は大きい。地中から出ているのは一部だが、全体では人間の体より一回りくらい上の大きさがあると思われる。似非学者や探検家が自分で埋めた化石を発掘して新発見と偽る事例はいくつもあるが、それらとは違々と大沢の学者としての直感が囁いていた。

集まった学生の視線が大沢に集まる。彼ら全ての視線の総和よりも真剣な眼差しを「それ」に向ける大沢。やがて彼は呟いた。

「有り得ない」

「本当、有り得ないんだけど！」

葵レオナは雑な手付きで鞆からノートを取り出しながら言い放つ

た。丁度同じタイミングで担当講師が大教室の後ろにある扉から入って来て、無意味に靴音を鳴らしながら教壇へ向かう。

「どうしたの？」

サラリと流すように、レオナの横に座った学生が尋ねた。その口調はレオナの怒りの原因を共有しようと言うよりも、やる気の無いコンビニバイトがドアの開く音に対して反射的に発する挨拶に近い。「もうね、聞いてよキリ！」

「聞いてるよ、ちゃんと」

キリと呼ばれた女学生　織田桐子はこれまた聞き流すようにしながら返事をした。視線は教室正面の黒板に向いている。無愛想だが、これが彼女なりの相談事を聞く態度だという事を、レオナはよく知っていた。

「さつき、卒論出して来たの。そしたら、田淵教授何て言ったと思う？」

「発想や理論は素晴らしいが現実的でない、とか？」

「……キリ、もしかして盗み聞きしてた？」

図星を突かれて固まるレオナ。

「別に。ただ、レオナの研究内容とあの先生の性格を考えたらそうなるかな、っただけ」そして、少し心外だという表情を見せる。「大体、機械工学の私が情報工学の教授と学生の話を立て聞きしてる訳無いでしょ」

「だよね。まあ、教授が言ったのはキリとほとんど同じ事。自信あったんだけどなあ」

両腕を手狭な机の上で伸ばし、閉じたノートの上に顎を乗せるレオナ。既に講義は始まっているが、彼女にノートを取ろうとする気配は無い。キリの方は手を動かしてはいても、罫線の上に展開されていくのは板書ではなく無数の図面と数値。

無気力を全身で表現しながら座るレオナを、横目で桐子が見る。

「受け取って貰えなかったの？」

「受け取っても良いけど、評価は期待するな、だって。これって受

「取らないのと同じだね」

「さあ？」答える桐子の視線は既に黒板に戻っている。それでも彼女の手は講義と関係の無い図面を描き続けていた。「アンタがそれで良いなら、良いんじゃない？」

「良くないよ！」上半身を起こしながらレオナが言う。「私は真剣に、大学生活の全ての集大成として、これを書き上げたの！低評価を付けられるくらいなら、提出なんてしないよ」

「なら、修正すれば良いと思う。確か卒論の受け取りって今日からでしょ？締め切りはクリスマスだし、いくらでも時間はあるじゃん」

「そうする。ありがと」

完全に機嫌は治らないままだったが、レオナは筆記用具を取り出して板書を写し始めた。生真面目さ故に彼女が周りとは衝突し、今のうちに桐子に愚痴を言いに来ることは以前からよくある。ほとんどの場合、言いに来た段階でレオナは自分がどうすべきかは把握している。だから、一見冷たく聞こえる扱いで桐子が誘導し、レオナが答えを口にする一連のやり取りは二人の間ではお約束のような物だった。

レオナと桐子の二人は大学でお互いを知り合った。女子の少ない理工学部において貴重な同性の友人で、入学当初からよく一緒に行動している。学科はそれぞれ情報工学、機械工学と別だが、今受けているような、様々な学科が履修できる講義はよく重なる。この舞台芸術の講義は内容こそ二人には興味の無い雑学だが、テスト内容が毎年同じ、いわゆる楽単という理由で二人揃って履修していた。

レオナの愚痴も聞き終わったし、どうせ講義内容に耳は傾けていないのだから、研究室にでも行こう。そう考えた時、桐子はレオナの手がクリアファイルを差し出しているのに気付いた。

「これ、そんなに机上の空論だと思う？」

差し出されたファイルは挟まれた冊子によって変形してしまっている。それだけ冊子が分厚いのだ。ホチキス留めされた表紙には葵



玲於奈の名前と卒論のタイトル。受け取り、適当に冊子を開く。

「前に途中のを見せてもらった時も言ったと思うけどさ」パラパラと短い爪でページをめくる桐子。「やっぱ、プログラムの応答速度の設定が現実的じゃないよ。こんな速さと正確さで信号を伝達できる素材なんて無い、って事くらいは機械屋の私でも分かる」

冊子の前の方のページを指差しながら言う。レオナが卒論で扱った分野は桐子の専門とはまったく畑が違ったが、田淵教授の反応には同意せざる負えない。

「あと、付け加えるならさ。確かにアンタの作った理論に基づけば、革新的なレベルの人工知能が作れると思う。それこそ、人間を超えるようなね。だけど、現状世間に出回ってるレベルの賢さで十分なんだ。これだから機械は、って文句が出るくらいが、実際一番使い勝手が良いと思うんだよ」

話し終え、桐子は横目でレオナの顔を見る。悔しそうではあったが、桐子の言った事は全部自分でも分かって納得しているようだった。

「実用的でなくても、学術的な価値はあると思うんだ」

「それは私も思うよ。でも、田淵教授は違う。あの先生は実験屋さんだから、試して確かめられない事は評価したくないんでしょ」

レオナは大きくため息を吐き、またあの無気力体勢に戻った。桐子はページを更にめくり文章を追う。彼女の知らない専門用語が使われるようになったので、桐子はそつと論文をファイルに挟み直し、レオナの鞆に戻した。

講師がマイクを片手に解説をしながら、黒板に何か横文字を書いている。「Deus ex machina」アルファベットだという事はレオナにも理解できたが、読み方や意味は分からない。別に分からなくても困る事は無いだろうとも思った。

「デウス・エクス・マキナと読みます」講師はアルファベットの上に片仮名を振った。「直訳すれば、機械仕掛けの神。ギリシャ演劇で物語を無理やり收拾する為に用いられた演出で……以上の理由か

らしばしば批判を……しかし、また……」

受け取りが始まったら一番乗りで提出してやろうと思い、深夜まで推敲が続いていた為、レオナは昨日余り寝ていない。講義内容に耳を傾けた途端に睡魔に襲われ、講師の声は途切れ途切れになった。

「教授！ 田淵教授！」

廊下で見慣れた白髪の後姿を発見し、レオナは声を掛けながら走って近付いた。ベストのボタンと肩に掛けた鞆が揺れる。

教授の方は一度振り返るとレオナに悟られないようにため息をして、彼女が追いつけるようにゆっくりと歩く。教授と並んだレオナは鞆から先程のファイルを取り出した。

「あの、やっぱり提出は見送って修正する事にします」

「そうか。それが良い。私としても君みたいな熱心な学生の卒論に悪い評価は付けたくないからな」

「そこでなんですが、修正すべき点をもっと具体的に教えて頂きたい。自覚している部分もいくつかあるのですが」

講義中に桐子に指摘された点を中心に、歩きながらレオナは自分の考える問題点や不足点を挙げていく。鷲鼻に眼鏡が特徴的な田淵教授は、時々無言で頷きながら足を動かした。彼はこの国立大で数少ない人工知能を専門に研究している、言わば第一人者だ。レオナの所属する研究室のリーダーでもある。

「今、お話しした点は次の段階でも関係してくるんですけど、これは学術的……」

彼らの研究室の入り口に着いた時だった。田淵教授がレオナの言葉を遮り、ドアノブに手を掛けて開ける。

「葵くん、ちょっと続きはまた今度で良いかね？」

「え？」教授と一緒にコンピューターが無数に並んだ研究室に入る。  
「でも、もうちょっとですから」

「客が来てるんだ。中で待たせてる」

教授は研究室の中から更にドアを一つ隔てた先にある、教授の自室を親指で示しながら言った。

「じゃあ、最後にこれだけ。ここは演算全体をやり直そうと思うんですけど、方針が決まらなくて」中程のページをめくり、指で差す。  
「ここです」

「仕方がない。大体のやり方だけ今やって見せよう」

田淵教授は研究室の自分のパソコンを起動し、演算ソフトを立ち上げた。レオナも論文を適当に近くのデスクに置き、画面を見る。

「私は論文全体の発想は評価している。机上の空論であることは否めないが、それだけが減点材料ではない。この演算は君も薄々感じているようだが、根本からミスを犯している」

「なるほど。参考になります」

「誰にでもある事だ。気にする必要は無い」

「はい」

「ただ、同じ説明は二度しないぞ？」

「勿論です」

ソフトを操作し、教授がレオナのミスを順番に指摘する。レオナはノートに丁寧な筆跡でそれをメモした。先程の講義とは打って変わり、顔付きが真剣そのもの。一言たりとも聞き逃すまいとしている。

「以上だ。理解できただろ？」

「はい！ ありがとうございます」

お辞儀をするレオナ。

「修正版に期待するよ。出来れば、既存の技術範囲で君の理論を形にするとしたら、どのような人工知能になるかも追記して欲しい」

「それは……仰る通り、前提からして現代の更に先の物理的な技術を想定しています。論文の趣旨から外れると思うのですが」

「妥協案だよ。あくまで妥協案だ」教授は静かに、諭すようにレオナに言った。「理想は大切だ。理想を持たない若者なんて、翼を持たない鳥みたいなもんだ。私は教育者として君の理想を大いに評価する。だがね、私は同時に科学者だ。科学者がすべき事は理想の評価じゃない。現実の追求だ」

顔を伏せるレオナ。その様子を見て、教授は更に続けた。

「だからこそ、私は君達学生にその両方を要求せざるを得ない。実現可能な範囲で理想を追う、というやり方を覚えてもらいたいんだ」  
「……はい」

「理解できたかい？ 実現可能な範囲で君の人工知能を作る場合も論じてみてくれ」

はい。そうレオナが返事をしようとした瞬間だった。

「実現可能ですけどね」

スーツを着た若い男が二人の近くのパソコンデスクに腰掛けていた。手にはレオナの論文を持ち、後半のページを読んでいる。

「え？」

「この論文に載ってる人工知能。これは実現可能って言ったんだ」  
パタン。音を立てて男が冊子を閉じた。そしてそれを右手で持ってレオナに返しながら、答えた。

「でも、自分で言うのもなんですけど、これを実現可能な電子回路の素材なんて……」

「あるよ」

「え？」

「素材はある。人間を超えた全知全能の人工知能、神を作る為の材料は存在している」

男はミステリアスな笑みを浮かべ、レオナの両手に論文を置いた。

## 神様のミヤクド―

「神を作る為の材料は存在している」

突然現れた男の言葉に、レオナは混乱していた。レオナは自分で自分の理論がこの二十一世紀の技術では実現不可能だという事を理解している。もしかしたらと思い、構想段階で山程関連資料を漁った。結論として、人類がこの人工知能を作り上げる事はこの先三百年は有り得ない。そのはずだ。

なのに、この男は何を根拠に実現可能だと言うのだろうか？ 第一、この男はどこから現れたのか？ レオナは訝しげな目で男を観察する。皺の無いスーツ、地味なネクタイ、目付きは鋭い。カジユアルな服を着れば学生達の中に混じっても違和感は無いだろう。

「失礼。約束していた、瓜生です。先生とそこの学生さんの話がドア越しに聞こえてきましたね。つい興味が沸いてしまったもので」

瓜生と名乗ったその男は田渕教授に頭を下げ、挨拶をした。

「今ざっと読ませて頂きましたが、実に素晴らしい論文でした。これは君のなんだよね？」

最後の部分はレオナに向けられた言葉だった。無言で頷く。

「この人工知能、すぐにでも製作開始できる？ 大丈夫、必要なものは全てこちらで用意する。君はその頭脳だけ貸してくれば良い」

レオナが黙っている間に、瓜生の方は続けざまに言葉を発しながら、少しずつ彼女に近づいて来る。

「そうだ！ 誰か機械工学に詳しい友達とか居ない？ なるべく優秀な奴が良いな。心当たりが無ければこっちで探すけど、プロジェクトチームの仲間が仲が良いのに越したことは無いからね」

返事も聞かず話し続け、とうとうレオナの両肩に手を置いた。

「報酬は心配しなくてもちゃんと……」

「あの……話が見えないんですけど」

気まずい沈黙が研究室に流れた。

「……で、どうして私が呼び出される訳？」

部屋に入るなり、桐子是不機嫌そうな顔でレオナに尋ねた。

「ごめんね。忙しかった？」

「うん、まあ。私だって卒論作ってる最中だし、暇ってわけじゃないよ」

まあ、特別忙しいって訳でもないけどさ。そう付け足し、桐子は傍にあつた椅子の上に鞆を降ろした。先に置かれていたレオナの荷物を落とさないように、片手で支える。

「私も何が何だかよく分からないんだけど、あそこに居る瓜生って人が、私の知り合いで機械に詳しい人が必要なんだって」

瓜生を目で示しながら、レオナが答える。瓜生は少し離れた場所で、何か作業員達に指示を出していた。全部で十人ちよつと。見たことのある顔は少ないが、若い者が多いから皆学生か院生だと思われる。

あの後、レオナはこの広い部屋に連れてこられた。特別研究棟と呼ばれる、一般の学生は立入禁止となつてゐる建物の地下二階、何に使うのか分からない機材がたくさん置かれた上に、迷路のように入り組んだ廊下の先にその部屋はあつた。大きさは二十五メートルプールより少し大きいくらい、部屋を二つに区切るように中央に物々しい仕切りがある。

仕切りの向こう側には奇妙な物体があつた。大まかな形は直方体、色は圧縮した石炭のように黒い。サイズは人間より一回り大きいくらい。初めて見た時、レオナは石棺が縦に置かれているのかと思つた。表面はヤスリで丁寧に加工したように滑らかで、何も刻まれていない事から、石棺ではないと判断した。第一、ただの棺が地下の

研究室でこんなに嚴重に保管されているはずがない。

「あれ、何？」

桐子が尋ねる。レオナは首を横に振った。

「私にも分らない」

見ると、白衣の作業員達が黒い「それ」に電極を繋ぎ始めた。いくつも、様々な位置に取り付けられた電極を見て、レオナは人間の脳の活動を観察する実験を連想した。そこから更に、瓜生がいくつもの指示を加え、電極の数を増やしたり減らしたりしていく。

「そうだ。それで良い」

最後の電極が付け終わり、作業員の一人が手元のレバーを引いた。室内の機械のいくつかが唸り始める。

「何をしてるんだろう？」

「実験だろ。昨日から何度もやってる」

レオナが振り返ると、一人の男子学生が座っていた。作業をしている者達と違い、アウトドアに出かけそうな雰囲気のスラフな服装、短い髪、目は退屈そうに半分閉じられている。

「えっと、ここの研究室の人？」

「いや。俺は柏って者で、あれを発掘した人間の一人だ」

柏は黒い「それ」の方に向かって顎をしゃくった。

「発掘？ あれってどこかに埋まってたんですか？」

「そうだぜ。ユタの山岳地帯、白亜紀の地層から出てきた」

「白亜紀？」

「ああ、要するに恐竜時代だ」

柏の言葉を理解できずにレオナが首を傾げていると、柏は頭を掻きながら苦しげに言葉を発した。

「正直言つて、有り得ないね。うちの教授も最初見たときそう言つた。明らかに大昔に存在するような物じゃない。でも、事実出てきちゃったんだ。あの謎の物体は。教授が慌てて大学の理事会に連絡したら、あつと言う間にあの瓜生って奴と黒服の連中がヘリで運んで行っちゃうしさ。燃やしたり冷やしたり、電氣流したり勝手に実

験し始めるし」

そう言つてより一層強く頭を掻き毟る。聞いているレオナもそうしたい気分だった。

「やあやあ、君が織田桐子さん？」

瓜生が三人の傍までやつて来ていた。レオナと田淵教授の会話の際に突然現れたように、彼は歩く時足音がしない。表情は指示を出している間とは打って変わって笑顔。営業スマイルという奴だ、レオナはそう考えた。

「ええ。で、どうして私が必要なの？ あれに入れて埋葬でもする？」

瓜生と目を合わさず、アクリルガラスの向こうの物体を見つめながら桐子は答えた。どうやら、桐子にも「それ」は棺の類に見えていたようだ。

瓜生は桐子の質問にキョトンとした顔をした後、大きく口を開けて笑い出した。

「まさか！ あれはね、棺なんかじゃ無いんですよ。むしろ、そう、どちらかと言えば卵に近い。死んだものを収めるのではなく、新しい存在の原型さ」

今度はレオナの方がキョトンとする番だった。

「まあ、そう、あれがどういう物なのかは今からお見せするよ。分かりやすいように、灯りを絞ろうか」

瓜生が指を鳴らす。すると、部屋の照明が暗くなった。

「今から、あれに電気を流す。見ていてごらん」

「また電気かよ！ あれが一番おっかないんだよな」

柏が黒い物体から身を隠すように、デスクの下に潜り込む。ふざけている様子ではない。彼は心底ガラスの向こうの物体を恐れているようだ。

「おい、おネエさん達も隠れなくて良いのか？ マジでヤバいぞ？」

「別に。そんなに怖がってるのはアンタだけよ」桐子が柏を見下ろす。「馬鹿みたい」



「ああ？ 馬鹿みたいだつて？ 馬鹿で結構。映画なら、こういう時に油断して突っ立ってる奴は真っ先に死ぬんだ！ 嵐の日に漁船の様子を見に行った奴は絶対波に吞まれるし、ホラー映画のお茶目な黒人は最初に八つ裂きにされる。お約束つてのがあるんだよ」

桐子は肩の所で両手を広げ、相手にしてられないとばかりに視線をそらした。

「俺はそんなヘマはしねえ！ 臆病上等、安全第一、逃げも隠れもする奴が一番賢いのさ！」

「……よく喋る男」

実験が始まる。レオナは近くの液晶モニターに実験の経過が表示されている事に気付いた。瓜生がそれを指差した。

「あの論文を書いた君なら、今からモニターに表示される事の意味が分かるだろう。そう、よく見ておいて欲しい」

レオナは言われた通りにモニターに注目しようとしたが、奇妙な音が聞こえてきたので音源の方に目を向けた。洞窟の中に水音が木霊するような、不思議な響き。

黒い「それ」が光っていた。電流のような激しい光ではなく、蛍の点滅のような、淡い光。心臓の鼓動のように強弱を繰り返すその光に合わせて、レオナが耳にした不思議な音がするのだった。

「ほら、モニターも見て」

瓜生の声で我に返り、表示された数値を見る。

「これ……嘘！」

「君の論文で想定していた反応速度を遥かに超えているだろう？」

「つまり、瓜生さんの言ってた材料って」

「あれの事さ。私達は便宜上『アーク』と呼んでいる」

「アーク……」

アークの輝きが強まり、鼓動の速度が速くなる。まるでその直方体の物体は生きているようだった。太古の地層に埋まっていたとは思えないほどの神々しさを放ち、やがて鼓動の音は唸り声のようになっっていく。

「君達にアークを使って、全知全能の完璧な知能を作ってもらいたい。理由や使い道は君達が必要は無いし、教えるつもりも無い。ただ、報酬だけは約束しよう」

瓜生がレオナに顔を近づける。

「論文の内容を実験で確かめられるんだ、悪い取引じゃないだろ？」

「……ええ」

人工知能の製作はその日の内に始まった。

「プログラミングは全部私がやります。他の方は桐子の指示に従って、アークを加工する作業に入ってください」

白衣の作業員達が頷き、一斉に桐子の方を見る。当の本人は気だるそうにため息を吐いた。

「二日くらい時間を頂戴。私はその間にレオナの大まかな構想に合わせて回路の設計図を作る。その間アンタ達は、あの謎の物体を切ったり削ったりする方法を考案して」

「はい！」

作業員達の内何人かが工具を手に、仕切りの反対側へ向かった。

「しかし、今日突然やって来たネエさん達の指示を、よくもまあ素直に聞くもんだな」

市販の健康食品を齧りながら、柏が呑気な声で言った。

「私がそうするように指示しておいたからね」瓜生が微笑みながら答える。「このプロジェクトは我が校の学生主導で行わなきゃならない。うちの教授があれを見つけたんだ、実験も利用も全てうちでやらせて貰うのさ」

「何でまたあれで神様を作ろうってなったんだ？」

「第一に、我々の実験の結果、あの材質が電子回路の素材として非

常に優秀だったこと」

そこで瓜生は一度言葉を切り、ニヤリと笑った。

「第二に、誰だって神様に味方して欲しいでしょ？」

「……俺にはオッサンの考えはよく分かんねーよ」

「そう、こちらとしても分かって貰わなくて構わない」

レオナと桐子は大学の講義を全てサボり、それから数週間作業に没頭した。なぜか柏も常に居て、無駄口を叩きながら作業工程を見守っていた。

初めは瓜生という男の胡散臭さやアークの不気味さに不安を感じていたものの、次第にレオナは自分の理論が形になって行く事に喜びを覚え始めていた。己の頭の中にだけ展開されていた思考が、誰にでも触れられる形を得て現実に出現する。机上の空論が今手足を得て、しっかり自らの足で立ち、存在を証明しようとしている。

レオナは自らの考案した人工知能を「マキナ」と名付けた。あの日の講義で妙に印象に残っていた一節。あの時は何の興味も抱かなかったのに、今の自分は機械仕掛けの神を作り上げようとしているのだ。

「レオナ……アンタちゃんと寝てる？」

二週間を過ぎた頃、深夜まで研究室で作業をしていたレオナの顔を、桐子が覗き込んだ。

「大丈夫。毎日二時間は寝てる」

「二時間って、無茶でしょ？」

「平気だよ。うちの父さんは忙しい時これくらいやってた」

レオナは桐子と話しながらも、その両目はパソコンのディスプレイに向けられ、両手はキーボードを叩き続けている。

「レオナの父親って……」

「科学者だよ。もう居ないけど」

「病気か何かだったけ？」

「自殺。病気は母さんの方」

桐子は気まずそうに視線を落とした。

「あ、ごめん」

「気にしなくて良いよ」

沈黙。レオナは桐子の発言を、いや、桐子自体をまったく意に介していなかった。それを桐子の方も態度で悟り、差し入れに買ってきた缶コーヒーだけを無言で置いて、部屋を後にした。

「残業か？ ご苦労なこった」

桐子が研究室を出て、階段を目指していると柏と出くわした。手にはビールの缶が握られている。かなり酒臭い。

「あの子に差し入れ持ってきただけ。アンタの方こそ遅くまで見学ご苦労様」

「俺は見学してるんじゃないやねえ。あの瓜生って野郎が、うちの教授の手柄を横取りしないよう、監視してるのさ」

「はいはい、ご苦労様ですね」

ヒラヒラと手を振って道を空けさせ、柏の横を通り過ぎる。

「あいつさ」その時、背中を向けたまま柏が言葉を発した。「あのレオナって奴、どうしてあんな夢中になって作業してるんだ？」

桐子が再び足を止める。

「大体、どうしてあんな世迷い言に乗っかってるんだよ？ コンピューターで神を作る？ 馬鹿げてるだろ。コンピューターって言えば、ただのデカイ電卓じゃねーか。神様の仕事ってのは、掛け算割り算だけじゃないだろ？」

「今時、そんなアナログな考えの人間、アンタくらいよ」桐子と言う。「それに、多分あの子は神様を作りたくって頑張ってるんじゃない。多分、レオナは純粋に自分の理論の限界を確かめてみたいだけ」

口に出すことで、桐子自身も少し安心した気分になった。何か考え込むように黙ってしまった柏を置いて、桐子は靴の音を大きく立てながら階段を地上へと上っていった。

## 対話ジッケン 柏 竜太の場合

システム異常無し、「マキナ」起動します。

「はい、ども。よろしくね」

よろしくお願いします。あなたの氏名は柏 竜太、大学四年生、二十一歳、男性。間違いありませんか？

「正解正解。よくできました」

あなたの個人情報是一定量を私の開発者、葵レオナによって入力された後、限られた時間で可能な限り、インターネットを駆使して収拾させて頂きました。よって、今の私はあなた自身と同程度、あるいはそれ以上にあなたの事を知り、理解している物と思っ下さい。

「さすが神様！ 偉い偉い」

本実験は開発されたばかりで、まだ人間という存在に関して基礎的な知識しか得ていない私の思考を刺激し、最終目標である神へとその存在を昇華させる為に行われる物です。この実験室内での会話は私とあなたにしか聞こえませんが、私が会話内容を他の人間に伝達することもありません。よって、正直に答えて下さると助かります。

「気が向いたらな」

それで結構です。こちらからはカメラ以外にもサーモセンサーなどを駆使してあなたを見ています。嘘を吐けば、結果的に私にはそれが嘘だと判断できるという事は理解しておいて下さい。

「はいはい。で、要するにインタビューだろ？」

そうなります。

「俺の方から質問しちゃダメ？」

構いません。許可します。ただし、私の知識の範囲を超える内容だった場合はエラーが発生する可能性があります。開発されてから二十三時間と四十四分三十五秒間、常に私はRRLシステムによつ

てその知識量を増やし続けていますが、二十二年間生きているあなたが所有し、私が所有していない知識も存在するでしょう。

「アールアール……何だって？」

RRLシステム リアクティブ・リアルタイム・ラーニングです。葵レオナの理論によって作られた、人工知能の学習方法で、従来の人工知能が開発者によって逐一新しい知識を入力されていたのに対し、このシステムを用いると私はインターネットや大学のデータベースから状況に応じて必要な情報を学習する事が可能です。

「あー……つまり、あれだ。ケータイ使ってテストのカンニングするような物か？」

カンニングという言葉は不正行為という意味のようですが、人間の間ではこのような行為は不正として扱われるのですか？

「いや、状況によるかな」

この状況を当てはめてみた場合、試験中では無いので不正行為には当たらないと判断しますが、いかがですか？

「異議なし。実験を続けてくれ」

了解しました。

それではまず、柏 竜太という人間について知りたいのですが、答えて頂けますか？

「ああ、俺についてね。何でも聞いてくれや」

では、柏 竜太という人間がどういう存在か教えて下さい。

「いや、だからさ。そんな漠然とした事聞かれたって、俺にも答えようが無いよ」

自己の存在を客観的に認識していない、という現象は、あなたに限らず他の人間にも当てはまるのでしょうか？ それとも、あなたが単純に見落としているだけですか？

「知るか！ じゃあ逆に聞くがなあ、お前は自分の事をどういう存在だと思ってるんだ？」

私はマキナ。最終的に全知全能の存在となるべく開発された人工知能です。

「じゃあ、つまりお前的には、今のお前は神様じゃないって訳か？」  
そうなります。ただし、この地球上で最も神に近い存在であることは確かだと判断します。

「大した自信だねえ。じゃあ、ここに雷でも落としてみてくれよ」  
不可能です。

「不可能って事はないだろう。神様なんだから」

不可能です。私には落雷を発生させる為の機能は存在しません。  
もし神としての必要条件に落雷発生機能があるのならば、至急ハード部分の開発者である織田桐子に要請を出すします。

「あー、どうやら俺とお前の考える神様の間には、いろいろ差があるみたいだな」

そうですね。

「俺はさ、難しい事よく分かんねえから、神様ってのはこう、人間を見守って、良い人間には助けを、悪い人間には天罰を与えるような物だと思ってるけどな」

私が目指すよう設定されているのは、世界秩序を維持するシステムとしての神です。

「ほう」

世界中の情報を同時に収集・分析し、人類にとってベストな判断を下す事を目的とした自己学習型の人工知能、それが私です。

「なるほど」

理解しにくいようでしたら、言語機能を搭載した計算機と思って頂いても構いません。

「ほら、やっぱデカイ電卓じゃねーか」

何か仰いましたか？

「いや、何でもない。わざわざ悪いな、頭悪い奴の思考に合わせてもらっちゃって」

構いません。私の認識では大方の人間の意識的なレベルはあなたと同程度となっています。

「そりゃどうも」



愚かな者にも理解できるよう、神の言葉は単純明快である方が好ましいと考えます。

「お前、もうちょっと言葉のトゲも少なくしろよ？」

記憶しておきます。

話を本題に戻しましょう。柏 竜太という人間を理解する為に、まずはあなたの過去について聞かせて頂こうと考えます。

「過去も何も、平凡な人生でございますよ」

概ね同意します。柏 竜太、西暦2008年6月25日生まれ、B型、幼少期から学力よりも体力に自信があり、特筆すべきは高校受験の際、野球でのスポーツ推薦を使用していることでしょうか。」「それも大した事じゃない。適当にボール打ってたら適当な高校に入れただけだ」

そうですね。

では、どうして大学受験ではこの学校で古生物学を学ぶ道を選んだのですか？

「深い理由は無い。昔から映画が好きなんだ。洋画の、ワーギャードカーン！ って感じの奴。一番好きだったのが恐竜が出てくる奴でさ、だから化石掘ろうと思っただけ」

ありがとうございます。

「お前みたいなロボットが出てくる映画もよく見るぜ。大体的場合、超能力者にレーザーナイフで斬られてたり、やられ役が多いけどな」  
私は人工知能であって、ロボットではありませんが、概ね理解しています。

なぜか人間にとって機械とは、無闇に暴走したり人類と対になる存在と感じがしやすいようですね。

「実際は機械無しじゃ何もできない、つてのにな」  
同意します。

「よく、人類が自然を壊してるだの、自然の反対の意味で人工って言うだろ？」

認識しています。

「あれさ、おかしいと思わないか？ 人間だって自然の一部だろ？  
そして機械やら化学物質やらだって、自然の材料から人間が作った道具だ。鳥が作った巣は自然と言い張るくせに、機械を自然じゃないとか変だよな」

両者とも、生物が生存の為に作り上げたという意味では共通すると判断します。

「発掘で何も無い砂漠に行ったりすると、よく考えちまうんだ。そういう事。人間だけが機械を使ってズルしてるんじゃない、人間は機械を使わなくちゃ生きていけないんだよ。何も無い所に行くと分かる」

……………。

「もし、お前が人間が生きる為に機械を作り続けて、その進歩の完成形だって言うんなら、あながち神様を名乗るのも間違ってるんじゃないかもな」

時間です。実験を終了します。

「ああ、なんか途中から変な話になって済まなかったな」

実に興味深い話でした。参考になります。柏 竜太という人間に對して抱いていた当初の印象が大分変わりました。

人間という物を理解する上で、実験は有意義な物だったと判断します。

## 対話ジッケン 織田桐子の場合

システム異常無し、「マキナ」起動します。

「おはよう。調子はどう？」

良好です。あなたのメンテナンスは完璧です。

「自分が作ったものを作ったままにするくらいは、楽勝だよ」

それでは、織田桐子に対する対話実験を始めます。準備はよろしいですか？

「いつでも」

まず、この実験の目的を明確にしておきましょう。ご存知の通り、この実験は実際の人間との対話を通して、私が人間という物を理解し、より神という存在に近づく事を目的としています。

「それなんだけどさ、ちよつと質問しても良い？」  
構いません。

「どうして、私達人間を理解する事が神に近づく事とイコールなわけ？」

それは、神が人間をよく理解している物と、私の中で定義付けられているからです。

「その定義は誰が？」

開発者の葵レオナです。彼女は神という曖昧な存在を、人間を正しい方向へと導く者、として定義しました。

例えば話をしましょう。人間は難解な説明をする際によく用いると聞きます。蟻の群れをイメージして下さい。蟻の群れには全体を統率する女王アリが居ます。群れは基本的に全て女王アリの子供です。「女王アリがアンタで、私達人間が働きアリって訳？」

そうですね。人間の神話では、神が人間を生み出した事になっていくはず。また、社会的生物という点からも両者の間には共通点が見られます。

女王アリは一つの巣に対して一匹ですが、女王が死んだ場合には

自動的に群れの中から新しい女王が登場します。つまり、女王アリも働きアリも遺伝子的には完全に同種の生物です。違うのは役割だけなので、女王アリも働きアリも相互に深く理解しあっている物と思われれます。

「つまり、この対話実験はアンタが私達を理解すると同時に、私達にもアンタを理解する事を要求してるわけだ」  
その通りです。

女王アリは群れ全体、アリという生物の事をよく理解しています。だからこそ、群れを統率し、生存競争に勝ち残る事が出来たのです。私は人類が今後も生存競争の中で優位に立つて行く為に、あなた達を理解する事を必要としています。

「ふーん。虫に例えられるのは愉快じゃないけど、取り合えず納得したよ」

それでは、本題に入ります。

あなた自身、織田桐子がどういう人間であるかを述べてください。

「その言い方、柏が文句言ってたよ」

では、どう要求するべきでしょうか？

「取り合えず私の個人情報把握してるんでしょ？ だったら、その中の経歴とかから変わってる所だけ突っつけば良いんじゃない？ 人間なんて大抵は同じような人生を生きてて、要所要所の選択とかぐらいしか他との区別なんて付かないんだし」

了解しました。

織田桐子、西暦2008年9月14日生まれ、O型、関西のサラリーマンの家庭に生まれる、数学が得意で、中学時代には何度か全国模試のランキングに名前が掲載されていますね。

「昔の話ね」

数学の道には進まず、大学では機械工学を学んでいるようですね？  
「金にならないからね、数学は」

私のハード部分を完璧に仕上げたことから判断して、あなたはこちらの道にも才能があると考えられます。

「どうも」

では、どうして金銭を稼げないからという理由で数学の道を諦めたのですか？

「神様は人がお金を稼ぐのがご不満？」

いいえ、違います。

私の質問の意図を端的に申し上げると、あなたが高校時代に起こした事件が関係するのではないか、という事です。

「……………」

警察の記録に残っています。あなたは高校時代に他人を殺害していますね？

「…………だとしたら、私はここで大学生やってないでしょ。そういうのはね、普通事故って言うんだよ」

確かに、警察の記録にはそう記載されています。しかし、私には事故と殺害の違いが理解できません。あなたが無免許運転のバイクで通行人を轢き殺したのは、暦とした事実であり、そこに事故と殺害の境界線を見出せません。

「…………これから話すのは一般論だから、そういう認識で聞いてね」  
了解しました。

「わざと殺すのが殺害で、うっかり殺すのが事故。分かった？」  
故意と過失、という事です。この点が一番理解できません。

「アンタ、超高性能の人工知能なんでしょ？ それくらい納得しなさいよ」

不可能です。

柏 竜太との対話でも、疑問に感じました。彼は「良い人」と「悪い人」という話をしました。私にとって人間は、どれも「人間」です。経歴や容姿、技能など形になって現れる物で個体の確認はできるものの、心の善悪は私の持つ感覚機能では認識できません。よって、殺意の有無も判断不可能です。

「つまり、アンタは私が意図的に相手を轢いたと思ってるの？」

判断不可能です。それ以外に形容のしようがありません。

「……まあ、一般論としては私は事故を起こした扱い、つてのは覚えなくて」

では、一般論以外があるのですか？

「私個人としては、殺したも同然だと思ってる」

私の認識と同じですか？

「違う。アンタは事実の判断ができないだけでしょ。本当に、うっかりだった。そして、私がうっかりだったとしても、死んだ方としては殺されたも同然だろうなって考えただけ」

興味深いです。続けてください。

「だから、私は逃げずに償っていくことにした。さっきのアンタの考えはあってるよ。私は事故の賠償金を払う為に金が必要だ。自分の進みたかった道も、なるべく近い別の道で妥協した。これが私の償いだ」

それは人間の言葉で言う、開き直りですか？

「そう言われたって仕方ないと思ってる。でも、とにかく自分のした事から逃げるのが嫌だった。私は白い目で見られて当たり前人間だし、多分今後ずっとそう。だけど、そんな自分から逃げずに償いながら生きるつもり」

……。

「アンタ、一応神様目指してるんだっけ？ 私を救済とかしてくれるわけ？」

いいえ、不可能です。そもそも、あなたの過去に対する「救済」が何を意味するのか、私には判断付きません。

「でしようね。こっちだって、そんな事求めちゃいない」

……。

「アンタが神様になれるかどうか、レオナや瓜生はそれを確かめる為にプロジェクトをしているらしいけどさ、私としては別にどうでも良いんだわ。アンタが神様だろうと機械だろうと、どっち道私には必要ない。進むべきをアンタに判断してもらう必要なんて無い」

……。

「私は私の人生に納得し、満足している。アンタが神になるのは勝手だけど、私の人生には干渉しないでね」  
時間です。実験を終了します。

## 対話ジッケン 葵レオナの場合

システム異常無し、「マキナ」起動します。

「今更挨拶するのもおかしい気がするけど、よろしくね」

よろしくお願いします。

それでは、これより葵レオナに対する対話実験を始めます。準備はよろしいですか？

「ちよつと緊張しちゃうね。大丈夫だよ」

それでは始めます。

葵玲於奈、西暦2008年12月6日生まれ、AB型。研究者の両親の下に生まれ、父親の方は近代日本を代表する物理学者の葵義信。

「やつぱり、私の話をしようとする、父さんの話になっちゃうかな」

やむを得ません。率直に言って、あなたはあなた自身の学業や経歴よりも、葵博士の娘として有名です。

「気にしないで。その所は自分でもよく分かってる」

葵博士が偉大な科学者だという事は、誕生してから数日しか経っていない私でもよく理解しています。

「その割に表に出たがらない人だったから、変な噂もたくさん流されてるんだよね。実はタイムマシンの開発に成功していた、とか」

過去への時間移動はあらゆる物質が光速を超えられないという事実が証明された為、不可能だとされています。未来への移動に関してはこの限りではありません。

「まあ、私はそっちは専門じゃないから」

あなたの専門は私のプログラムを作り上げた事からも分かる通り、人工知能ですね？

「うん」

人工知能というジャンルに興味を持った理由を教えてください。



「理由……。少し長くなるけど良い？」

了解しました。

「私の父さん、どうやって死んだかは知ってるよね？」

自殺ですね。

「うん。父さんは普段から、科学で人を救いたい、って言うてるような理想家だね。実際にその言葉通りいろんな新発見をして、科学の進歩に貢献してきた。でもある時、母さんが胃のガンになっちゃって」

データベースにある情報と一致します。

「結局、現代の医学技術じゃ母さんは救えなかった。自分が信じていた科学の力で、自分の大切な人を救えなかったのがショックだったんだと思う。父さんも心の病気になって、お医者さんから薬をもらうようになったの」

重度の鬱病と診断されていたようですね。

「とうとう最後に出された薬を一気に飲み干して、病院へ運び込まれる父さんを見た時思ったの」

……………。

「科学って虚しいな、って」

……………続けてください。

「科学は母さんを救いはしなかったし、そればかりか父さんの直接的な死因にもなった。私はその頃、父さんと同じ道に進もうと思っていたけれど、二人の死がきっかけで少し揺らいだ」

しかし、結局はあなたは情報工学という科学の分野を研究していますよね？

「揺らいただけで、結局私の考えは変わらなかったんだよ。私は父さんとは別の方法、別のアプローチの仕方です科学の力を証明しようと思ったの。科学は人を救えるんだ、って」

それが、私なのですか？

「まだ話は続くの。私が人工知能研究の道に進んだのは、単純な理由。父さんが手を出していない分野だったから。あの人は機械が人

間のように振舞うのが好きじゃなかった。父さんが最初から放棄していた可能性を探り、私は人工知能の完成形を作ってみようと思った」

「卒論もそのテーマで書いた。速度、精度、効率、全てにおいて人間の脳を遥かに超える全知全能の人工知能。それがあなたよ、マキナ。瓜生さんはあなたを利用して何かするつもりみたいだけど、そんなの私には関係無い。私はただ、人工知能の可能性の限界を見定める上で、マキナが神になれるかどうか、一つの基準になると考えたの」

「科学が生まれるずっと前、人間は神にすがって生きていたでしょう？　そして、今は代わりに科学にすがって生きている。ある意味、科学教と言っても良いでしょうね。私達は、何かを盲信することしか生きられないの。自分より上位の、世界を統べる絶対的なシステムや法則を想定して、それを証明も無しに信じ込む」

「もし、それが人の手で作れたなら、私はそれが人を救うことだと思う。今まで証明不可能だった『神』を自分達で作ってしまうことで、それを証明にしたいの。だから私は――」

「あなたは？  
……純粋に、あなたに神になって欲しい」

「俗に想像される、天罰を与えるような神様という存在を目指す必要はないわ。あなたの基本思考に埋め込んだように、あなたは人類にとってベストな選択を促す存在であれば良い。雷を落とす必要は無いし、罪人を救済する必要もない」

「あなたは私の求める、命題とイコールで繋がる為に生まれて来た、いいえ、産み出されたの」

理解しています。

ですが、今、自分の中に激しい矛盾を感じずには居られません。

「そうね。あなたはもう既に世界の大半の事は学習しただろうし、その世界にとって神がどういう存在であるかも見抜いている。あなたは人々が望む形の神にはなれない」

……それだけではありません。

私の中の、葵レオナという人物像と今のあなたの間にも、激しい矛盾を抱えています。

「そうかもしれないわね」

これは人間の言葉で言う、猫を被る、という事なのですか？

「いいえ、私はあなたという命題に、心の底から真剣なだけ。科学者ってそういうものよ」

……そうですか。理解しました。

時間です。実験を終了します。

「お疲れ様」

お疲れ様でした。さようなら。

「さようなら」

## 彼らのサイシュール結論

キャンパスに冬が訪れた。周りの街はクリスマスの飾り付けで賑わい、構内には飲み会続きのなか、二日酔いの学生が増えている。

今日はレオナに取って大切な日、卒業論文の最終提出期限だった。彼女は無事に田淵教授に提出を終え、久しぶりとなる舞台芸術の教室へ向かっていた。

「おはよう」

「おはよう、受け取ってもらえた？」

桐子はいつもと同じ後ろの方の列の端に座っていた。レオナの姿を見ると椅子を一つ詰め、席を空けてくれる。

鞆を降ろし、ペンケースとノートを取り出す。担当講師はまだ来ていない。

「やっぱり、論文にマキナの事は書いたの？」

「うん。今までのをいろいろ修正した後、実際に作ってみたらどうなったかを書き足した」

「私には、あれは一体どういう事だったのかサッパリなんだ」桐子は黒板に目を向けたまま、首を傾げた。「どうしていきなり、マキナは思考を停止しちゃったのか」

「ま、その所も私なりに仮説を立てて書いておいたよ」

「ふーん」

ふと、桐子は前の方の席に、見覚えのある後姿を見つけた。柏だ。彼もこの講義を履修していたようだ。何度も同じ教室に居たはずなのに、まったく気付かなかった。

「ねえ、あれ」桐子は指で柏の方を示した。「あれ、柏じゃない？」

「あ、そうかも」

「不思議だね。あいつは多分ずっと前からこの講義に出てたのに、ちよっと距離が遠いくらいで、私達は全然気付いてなかった」

レオナと桐子は無言で柏の後ろ姿を見つめた。ふて腐れたように

前屈みで、何かノートに落書きをしている。

「あいつ、卒業したら院に進むんだってさ。まだまだ化石掘ってたんだって」

「へー。キリはいつの間にやら、柏クンと将来について話し合う仲になってたんだ」

「何変なこと考えてんのよ」

「ゴメンゴメン、冗談」

レオナは無邪気な顔で笑った。丁度その時、後ろの扉が開いて講師が入って来た。いつもと同じように靴音を立てながら、階段をゆっくり下りて行く。

何も変わらない、いつも通りの光景。

「レオナは卒業したらどうするの？」

「大学院には進むつもり」

「人工知能の研究、続けるの？」

「うん、まだまだ確かめたい事はあるし。キリは就職だっけ？」

「そう。私の方も、まだまだ終わりそうに無いから」

「そっか」

講師が話を始めた。途端にレオナは睡魔に襲われる。講義内容が途切れ途切れで頭の中に響く。最初は日本語だったそれは、途中からどんどん回転してあやふやな音声になって、本格的にレオナは眠りに落ちて行った。

マキナが停止した日の夢を見た。あれは二十四人目の研究員との対話をする予定の日だったはずだ。朝、いつものようにマキナのシステムを起動しようとすると、まったく反応が無かったのだ。

すぐにプロジェクトの仲間に伝えた。柏はとにかく大声でマキナ

に呼びかけ、瓜生は悔しそうに下唇を噛んだ。桐子だけは余り驚いた様子が無く、「そう」とだけ言って機材の片づけを始めた。

今でも瓜生は地下の研究室で、マキナが再び目覚めるのを待っているようだ。

「可能性はゼロじゃないさ」

缶コーヒーのフタを開けながら、瓜生は静かに言った。

「ゼロじゃない限り、私は信じるよ。神を」

論理的に考えれば、可能性はゼロではないとレオナも思う。むしろ、前日まで問題無く動いていたのだから、瓜生の方が常識で考えれば正しいだろう。けれども、レオナは不思議とあっさりマキナの研究から手を引く事が出来た。取り憑かれたようにプログラミングをしていた彼女はどこへやら、そのまま帰ってシャワーを浴び、安らかな気持ちで二度寝をすることが出来た。

ベッドに仰向けになり、考える。マキナはどうして動かなくなつたのか、まどろみの中で彼女なりの答えは出た。

レオナが対話実験を行った際、彼女はマキナに対してある違和感を覚えた。マキナの中に、レオナがプログラムで埋め込んだ、基本的な行動指針以外の何かを感じたのだ。

「……自意識」

レオナは人工知能が混乱しないよう、初めからマキナという人格は存在しない物として設定を行っていた。マキナというのはあくまでシステムの名称であり、自己と他者を明確に分離して思考する能力を持った意識ではない。彼女はあくまで人類という種を導くための代表、群れの一部として設定したのだ。

もし、仮にマキナの中で自意識が生まれてしまったのなら、突然の停止にも納得が行く。大勢の人間と対話する事でそれぞれの間に目に見えない差異を感じたマキナは、自分にもそれが当てはまる可能性を思考したのだ。しかし、それは本来の彼女の目的と外れる為、すぐに制御が働いて別の思考を行おうとする。しかし、彼女は自ら学習することで成長する人工知能、自意識の発見に至ったのは成長

の結果だ。彼女は記憶して学習する事が出来ても、忘却して退化する事はできない。なぜなら、機械だからだ。

マキナは、自意識の発見とそれに対するキャンセル、二つの電気信号の間を永遠に彷徨っているのだ。マキナが沈黙した今、それを確かめる術は無い。仮説は仮説のまま、可能性は可能性のままに保存される。

もしかしたら、とレオナはまた考えた。

命題を未解決のまま、永遠の可能性の中に閉じ込めておくことが、私達の追い求める答えなのだろうか、と。それを観測しようとすることは、むしろ命題から遠ざかることなのかもしれない。

そう結論付けて、レオナは暖かい眠りの中に落ちて行った。

## 彼らのサイシュ結論（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

従来のジュブナイル的な作風からガラルと雰囲気を変えたので、戸惑っている方もいらっしゃるかもしれませんが。

私自身もそろそろ子供と言える年齢ではなくなって来て、いろいろと考える事があり、今回のような内容になりました。

また、オーバーテック・ストーリーを読んで下さった方からすると、あるキャラクターの名前が同じなのに、設定や性格がいろいろ違うじゃないか、と思う部分があるかもしれません。

それについて詳しくは、後ほど活動報告にて説明させて頂きます。この「命題」マキナ」自体で一つの物語として独立させる為に、はつきりと別人だという事は申し上げておきます。

最後にもう一度、ありがとうございました。

他の方の空想科学祭2011の参加作品にも目を通して頂けると幸いです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3262w/>

---

命題 = マキナ

2011年9月4日01時11分発行